

託夢

〔日本書紀九神功〕六十二年〔中略一云、沙至比跪知、天皇怒、不、敢、公、還、乃、自、窟、伏、其、妹、有、幸、於、皇、宮、者、比、跪、阿、敢、來、以、皇、言、報、之、比、跪、知、不、免、入、石、穴、而、死、也、〕

〔伊勢物語下〕むかし、世心づける女、いかで心なさけあらん男に、あひみてしがなと思へど、いひ出んもたよりなきに、誠ならぬ夢がたりをす、

〔保元物語一〕新院被召爲義事附鵜丸事

孝長重テ宣ケルハ、如夢幻泡影ハ、金剛般若ノ名文ナレバ、夢ハ無墓事也、其上武將ノ身トシテ、夢

見、物忌ナド、餘ニヲメタリ、披露ニ付テモ、憚有、争被參ザラント被申ケレバ、略下

〔甲陽軍鑑品第二第八〕信玄公聞召略中、夢は定なき者也、庵相なるたとへに、人に逢ても早く別たるは、

夢ほど逢たと云者ぞ、然ばむつかしき學問卦八を、めにも見えぬ文殊の夢に相傳は、皆偽の至也、

偽を云盜人に、將たる者は對面せぬ者也、略下

〔梅園叢書〕物の怪の辨

我安貞三浦かつて史をよみし時、秦の二世皇帝、關羽、張飛など夢み、詩集をけみせし時、孫光憲など

と詩などつくりし夢を見けり、是によりて思へば、僧徒の或は極樂にゆき、閻羅王にあひ、地獄の

有りさまなど夢に感ずる事さも有るべし、夢はもと心の影像にして、あやしむにたらず、ある人

のかたりし、おもひもよらぬ事を夢にもみるなれど、傘さして鼠の穴にはいる夢はみずといひ

しを、かたへの人の、此話き、たらん人は、みる事有るべしといひしは、尤におぼえ侍る、夢は心の

靈より發すれば、偶さきの事にあふ夢も有るべけれど、夢ごとくに左あるものにあらず、或は五臟

の病により、あやしき夢もあるものなり、ある人のいひし、我はよき夢みたりとて、嬉しともおも

はず、あしき夢みたり迎、あしくも思はず、あしき夢をば、よき夢のさしつぎとなし、よき夢をばあ

しき夢のさしつぎとなすと云ひし、一時の戲言ながら、おもしろく聞え侍る、

不信夢